

〜shirayuki 姫〜

工藤 大嘉

CAST表

リンゴ共和国

国王ヨードーフ：白雪姫の父。ちよつと色黒。素直で馬鹿。

王女パトリシア：白雪姫の母。わがまま。

継母キュロス：パトリシアの妹。カッパ共和国に恋人がいた。純粹。

キクラゲ姫：母の思うような姿で生まれる事が出来なかった。母を殺し変人達の所へ逃

げ込む。純粹。

白雪姫：キクラゲ姫の妹。人工授精で生まれた。母の思い描いた姿で生まれた。いやみ

っぽい

兵士チャン：最近国王に仕える身となった。新人。

召使いランデブー：心優しい。おせっかい。

召使いドド：仕事ができない。

召使いチョリチョリ：給料もいいし、なんとなく召使いやってみた

召使いDJワタクシタワシ：ラップに燃える召使い

7人の変人

先生：眼鏡好きで眼鏡を何個も頭に掛けている。状況によって使い分ける

怒りん坊：オコリー族

ねぼすけ：3分毎に目にタバスコを入れて眠らないようにしている

くしゃみっぽい：鼻に洗濯バサミを挟んでくしゃみが出ないようにしている

没？ Bダッシュ：車のタイヤを追いかけてしまう男。

没 お色気：性欲強い。小人たちのマドンナ。

没 鈴木：普通を求める人。

カッパ共和国

カッパキング：キュロスと恋仲。

王子：B専。あほ。

???

イノシシ：国王に命じられて白雪姫の面倒を見る。本能のままに動いている

etc...

医者・看護師・警察

カッパ研究会委員長・デモ隊・暗殺部隊

「オーブニング」

イノシシ「世の中は解明されていないことだらけです。宇宙の終わり、未確認生命体、不思議な世界はどこかにあるんじゃないだろうか。だって無いということが言えないんですもの。火星でiPodを聞いている人間がいるかもしれないじゃないですか。もう一度言いましょう。世の中は解明されていないことだらけです。これは私達のすぐ側にあるかもしれない世界。今日はその世界をこっそり覗いてみましょう。」

「自由に生きたい」

キクラゲ姫「私は自由に生きたかった。歩く、歩く、歩く。太陽の光を浴びる。誰かに何を言われたわけでもなく、太陽の光を浴びる。私は自由に生きたかった。」

「戦争」

チャン「国王様！大変です！敵が、敵が攻めて参りました！」

ヨーデフ「……」

チャン「大変です！敵が、敵が攻めて参りました！」

ヨーデフ「……」

チャン「国王様！！……無視はやめてー。この一大事に無視はやめてー。」

ヨーデフ イヤホンを外す

ヨーデフ「ああ、すまんすまん。……やはりDJワタクシタワシは最高だな。」

チャン「大変です！西のカップ共和国が攻めて参りました！国王様どうしましょう？！」

ヨーデフ「うろたえるな、うろたえるな。今日の天気予報を見ておらんのか？雨のち晴れ。

やつらは途中で皿が渴くのを恐れて撤退するに違いない。いつものパターンではないか。」

チャン「はい、いつもなら途中で撤退していくのですが……やつらなにやら片手にペットボトルを持っておりまして、その中に水を蓄えているそうです！」

ヨーデフ「なに！？やつらめ、考えおったな。くそ、どうしたものか、国王パニック。」

チャン「国王様、パニックっている時間などございませぬ！一刻も早く手を打たなければ、

一国の王だけに……」

ヨーデフ「ん……」

チャン「あつ無視……」

ヨーデフ「そうだ！私に考えがある。国王天才。私をカップパどものところへ案内しろ！」

チャン「……はい。」

チャン いじけている

ヨーデフ「早く行くぞ。ほれ、案内しろ。」

チャン 洪々案内する

「子供を産もう」

パトリシア 鼻歌を歌いながら服を縫っている 途中で指に針を刺してしまおう
王女パトリシア 「あっ！……この雪のように白い肌で、この血のように美しい頬を持ち、そしてこの窓枠のように黒々とした髪を持った子供が欲しい……名前は白雪姫……」

「戦争2」

チャン 「国王様！まもなくやつらのいる所へ到着します！」

ヨーデフ 「あっちよと待って。もう一回コンビニ戻っていい?? ストロー入ってないんだよ。」

ストローないとジュース飲めないよ。」

チャン 「国王様！ストローを貫いに行っている間に奴らに侵略されてしまいます！さあ、いきましよう。」

ヨーデフ 「うーん……はい。国王我慢する。」

チャン 「あれ、おかしいな。さっきまでこちら辺にいたんだけどな。」

ヨーデフ 「お前本当に見たの？ねえストロー貫ってきていい？やっぱり飲みにくいわこれ。」
カッパキング 「カッパッパッパッ！そんなところで何をしておいですか？国王様。」

ヨーデフ コンビニへストローを取りに行く

チャン 「出たなカッパキング！そんなところに隠れていやがったか！」

カッパキング 「お前たちの行動は遠くから監視させてもらったよ。まさか国王自らおいでになるとは思ってもみなかったが。ここで会ったが百年目。国王の首、貰い受ける！」

チャン 「そうはいくか！国王様にはお前たちを蹴散らす作戦がある！国王様、いまこそ作戦を執行する時です！」

間

カッパキング 国王がいらないことに気づく

チャン 「国王様、私を無視して遊んでいる場合ではないのです！さあ！」

間

カッパキング 「国王いないよ……」

チャン 「そんな馬鹿な。人がそんな簡単に消えてたまるか。」

チャン 振り向く

チャン 「いないー！えー！さっきまでここにいたのに！国王様——！国王様——！」

国王 コンビニから戻ってくる

チャン 「いたー！国王いたー！」

ヨーデフ 「やっぱりこれだよねー。ストローで飲むのが一番おいしい。国王満足。」

チャン 「国王様！こんな時にどこに行っちゃったんですか?!」

ヨーデフ 「いややっぱりストローないと国王ジュース飲めないからコンビニ行ってきた。てかおまえさつき国王呼び捨てにしたよね？思いつきり国王って呼び捨てにしたよね？」
チャン 「こんな時に…いや怒っている場合ではない！国王様！カップキングを発見しました！例の作戦を決行しましょう！」
ヨーデフ 「あ、無視だ。流れに任せて国王を呼び捨てにしたのをなかった事にしようとしている。」

カップキング 「俺を見ろー！」

ヨーデフ・チャン カップを一瞥

ヨーデフ 「なあ、お前さつき確実に国王呼び捨てにしたよね？ねえ？どういうこと？」

チャン 「いや、それは…」

カップキング 「そういうことじゃなくて！」

ヨーデフ 「え？なに？」

カップキング 「いや、だから国王様はなにをしにここに来たんですか？」

ヨーデフ 「…カップを倒しに。」

カップキング 「ですよねー！そうですよねー！」

ヨーデフ 「うん、そうだけど…」

カップキング 「今、目の前にいるのは？」

ヨーデフ 「部下。」

カップキング 「そうじゃなくて！」

カップキング 自分を指差す

ヨーデフ 「あつ！カップキング！遂に姿を現したな！」

カップキング 「遂にじゃねーよ！おせーよ！どっからどう見てもカップだろうが！」

ヨーデフ 「それはどうかな？」

カップキング 「な、なんだよ。」

ヨーデフ 「お前がカップであるかどうかやって証明できる？」

カップキング 「そ、そりやお前この頭にある皿とこのキュウリが証明してんだろ。」

ヨーデフ 「それはどうかな？もしその皿とキュウリでカップだと証明できるとしたならば、人間でもカップだと証明できる。」

カップキング 「ど、どういうことだよ？」

ヨーデフ 「人間の頭に紙皿を乗せてキュウリを持っていればいいだけの話だからな。」

チャン 「た、たしかに。」

カップキング 「ふ、ふざけるな！俺はカップだ！誰がなんと言おうと俺はカップだ！」

ヨーデフ 「それではお前がカップかどうか調べさせて貰おう。」

ヨーデフ カップキングに近づく

チャン 「国王様、危険です！」

ヨーデフ 「案ずるな。私に任せておけ。作戦はもう始まっている。」

チャン「え？」

カップパキング「望むところだ！体の隅々まで調べてみる！」

ヨーデフ「それでは失礼する。」

ヨーデフ「カップパキングの体を触っていく」

ヨーデフ「ほー、確かに頭と皿は繋がっている。紙皿ではなさそうだ。」

カップパキング「あ、あたりまえだろ！そんなチンケなものと一緒にするんじゃないよ！」

ヨーデフ「ほー、はいはいはいはい・・・あっ！」

カップパキング「なんだ！？」

カップパキング「はっ！」

ヨーデフ「ペットボトルを取る」

ヨーデフ「はっはっはっはっは！これでお前は皿に水を与えることができない。」

チャン「国王様！流石です！ストローを取りに行くところから作戦は始まっていたのですね！」

ヨーデフ「あたりまえだ、馬鹿者。ワシをだれだと思っておる。国王だぞ。これで奴らは撤退していくしかない。国王天才。」

ヨーデフ・チャン「カップパキングを見る」

カップパキング「皿に水を与えている」

ヨーデフ・チャン「……………」

カップパキング「撤退？？」

ヨーデフ「く、くそう！まさか予備があつたとは……………」

チャン「国王様どうしましょう？！」

ヨーデフ「……………わっはっはっはっはっは！」

カップパキング「な、なにを笑っていやがる？！」

ヨーデフ「聞けカップパキング！おまえが水の予備を持っていることなど想定内だ！」

カップパキング「な、なんだと！？」

ヨーデフ「一つの作戦だけで国王が務まるとでも？？馬鹿者が、作戦は星の数ほど考えておるわ！」

チャン「さすが！我らが国王！」

ヨーデフ「おい、お前の右手に持っているものはなんだ？」

カップパキング「キューリだ。」

ヨーデフ「左手に持っているものはなんだ？」

カップパキング「ペットボトルだ。」

ヨーデフ「それがすべてさ、この時点で勝負は見えている。」

カップパキング「どうということだよ！？」

ヨーデフ「おまえは今、右手で栄養を取り、左手で頭の皿に水を与えなくてはならない。これがどういうことかわかるか？」

カップキング「…両手がふさがれている!？」

ヨーデフ「果たして両手がふさがれているカップが、この国王に勝てるだろうか? いや勝てない。絶対勝てない。」

カップキング「こそ!」

ヨーデフ「それだけではない! お前はキュウリというこの世で一番栄養価が低い食べ物でしか栄養を取ることができない。即ち、お前は常にキュウリを食べていないと栄養失調で倒れてしまう。さらにだ! お前はこの天候のせいで常に頭に水を与えなくてはならない! そんな状態でこの国王に勝てるだろうか? いや勝てない。絶対勝てない。」

ヨーデフ「長き戦いに終止符を打とうではないかカップキング。国王に葬られることを生涯の誇りとして死ぬが良い。」

ヨーデフ「えいっ!」

「自由に恋がしたかった」

キュロス「いつの時代も戦争戦争戦争、ほんと嫌。自分達のより良い生活を求めて殺し合う。相手のことなんかこれっぽっちも考えていない。…戦争が憎い。支配するか支配されるか、この世は大きく二つに分かれている。私は自由に恋がしたかった。誰にも支配されずにただあの人と共に生きていたかった。同じ場所で、同じご飯を食べて、同じ床で寝る。それだけでよかったの。私は自由に恋がしたかった。」

「子作り」

パトリシア「あなた、あなたお話があるの。」

ヨーデフ「ふむ、どうした??」

パトリシア「私達も結婚してお互い落ち着いてきたじゃない? だからそろそろ子供を産んでもいいんじゃないかと思うの。私も王女の仕事にも慣れてきたし。」

ヨーデフ「ふむ、たしかに。」

パトリシア「あのしつこいカップ共和国も滅ぼしたし、今がチャンスなのかなーって。」

ヨーデフ「ふむ、たしかに。」

パトリシア「もう、名前も決めてあるの! 名前は白雪姫。」

ヨーデフ「おお、もう名前まで決めているのか。」

パトリシア「この雪のように白い肌で、この血のように美しい頬を持ち、そしてこの窓枠のように黒々とした髪を持った女の子。」

ヨーデフ「お、おおそこまで決めているのか。しかし容姿ばかりはお前の思うようにはいかぬぞ。」

パトリシア「いいえ! そんなことはないわ! だって私にはもうイメージできているの。可愛くて美しい我が子の姿が。きっと女ってそういう生き物なのよ。」

ヨーデフ「そうか、ワシは女の気持ちに分からんのでなんとも言えないが…」

パトリシア「国王にも分らないことがあるのね。」

ヨーデフ「こら私を馬鹿にするでない！」

パトリシア「馬鹿になんてしてないわ。ちよつとふざけただけじゃない…ねえ、あなたが何を望んでいるかわかる？」

ヨーデフ「…」

パトリシア ヨーデフにキスをし抱きつく

「身ごもる」

パトリシア「あつまた蹴ったわ！あなたあなた白雪姫がまた蹴ったわ！」

ヨーデフ「白雪姫ー、元気に育ってるかー？？パパだぞー。」

ランデブー「白雪姫様ー召し使いのランデブーですよー。」

パトリシア「止めて。あなたみたいな不細工が白雪姫に話しかけないで、不細工が移るわ。」

ランデブー「はい、すいませんでした。」

ヨーデフ「そんなことあるわけないだろ。色んな人から愛情をもらった方が幸せではないか。ランデブー白雪姫にたくさん話しかけておくれ。」

ランデブー「はい、ありがとうございます。」

パトリシア「いいえ！話しかけてはなりません。白雪姫に悪影響を及ぼすに違いないわ。」

ヨーデフ「ごめんよランデブー、出産前でナイーブになっっているんだ。」

ランデブー「いえいえ、私のことはお気になさらずに…それにあと数週間の辛抱ですから。白雪姫様が生まれればまた元の王女様に戻られるでしょうし。」

ヨーデフ「それもそうだな。ただ今日は特にナイーブなようだから、パトリシアに付きつきりではなく、なにか別の仕事をしてくれ。」

ランデブー「はい、わかりました。」

パトリシア「なにか言った？」

ヨーデフ「なんでもない、ランデブーに仕事の話をしていただけだ。お前もほら、出産前でナイーブなんだからベッドで安静にしていたらどうだ？」

パトリシア「言われなくてもそうするつもりです。白雪姫に愛情を注ぐのが今の私の仕事ですので。では。」

9

「ラジオ」

キュロス「ねえあなた、世界で一番美しいのはだあれ？」

ラジオ「それはもちろんあなただ。あなたがこの世で一番美しい。」

キュロス「本当にそう思ってるの？」

ラジオ「もちろんです。あなたがこの世で一番美しい。クレオパトラよりも初音ミクよりもガンジス川よりも」

キュロス「ん、その例えはよく分からないわ。」

ラジオ「あなたは世界中の誰よりも美しいということです。」
キュロス「…ありがとうございます。」

「う、う、うまれる」

パトリシア「白雪姫、ここであなたの名前を思いついたのよ。雪が綺麗に降っててね、私はパパの服を縫っていたの。そしたら、間違って指を針で刺しちゃってね。その時よ、白雪姫。あなたの名前を思いついたのは。ちょっと痛かったけど、あの時計で刺してなかったらあなたは生まれていなかったかもしれない。そう思ったらなんか刺しちゃってよかつたなーって思えるの。うふふ、早くも親馬鹿ね。…もうすぐよ、もうすぐママに会えるからね。白雪姫。ふふふ。ふふふふふッ！？」

今までにない痛みに悶える イスから落ちる

パトリシア「そうかい、白雪姫。そんなに早くママに会いたい？う、嬉しいわ…」

一 番 重 い 痛 み が 来 る

パトリシア「だれか！だれか！」

ランデブー「お、王女様！！ど、どうなさいました!？」

パトリシア「う、産まれる!!!」

ランデブー「エッ!?!う、産まれる?!あーどうしましょ??だれか、だれか?!」

「白雪姫出産」

パトリシア「ハッハッ、ううううう…」

医者「大丈夫ですよ、落ち着いてー吸ってー吐いてー吸ってー吐いてー」

助手「もう少し、もう少しですよー」

パトリシア「白雪姫、もう少し、もう少しよ。」

医者「ほらー出てきたー頭がでてきましたよーもう少しですよー。吸ってー吐いてー吸ってー吐いてー」

助手「あっ!もう少しです、もう少し…」

パトリシア「ふう!ふうううう!」

赤ちゃんの泣き声

助手「あーよかったねー、出て来れたねー。お母さんちょっと待って下さいねー。いまへの緒をきりますからねー」

パトリシア「白雪姫、白雪姫…」

医者「あらー、かわいい女の子ですねー、ほらお母さんですよー」

医者 白雪姫を渡そうとする

パトリシア「おいで白雪姫」

しかしそこには色黒の赤ちゃん

パトリシア「えっ?」

医者「どうしたんですか？ほら、抱いてあげてください。」

パトリシア「……ちがう。」

医者・助手「えっ？」

パトリシア「こんなの白雪姫じゃない。私の子供のはずがないわ。」

医者「何を言ってるんですか、あなたが産んだ元気な元気な女の子です。見たところ、障害などありません。」

パトリシア「変な悪戯はやめてちょうだい。私の白雪姫はどこ？いま産まれたはずよ。どこ？」

医者「ですからここにいないですか。あなたのお子様か。」

パトリシア「違う、白雪姫は雪のように真っ白な肌を持つてるの。こんなの白雪姫じゃない。」

医者・助手「……」

パトリシア「白雪姫はどこ？ねえ、答えて。」

医者・助手「……」

パトリシア「答えろ！」

医者「で、ですからこちらがあなたが産んだお子様です。」

医者 赤ん坊を手渡す

パトリシア「本当にこれが私のこども？」

医者「……はい。」

パトリシア「これが白雪姫??」

医者「……」

パトリシア「……殺して。」

医者・助手「えっ？」

パトリシア「こんなの私の子供じゃない。殺して。」

医者「い、いや」

パトリシア「あやしてる振りをして首の骨を折ればいいでしょ。誰にも言わないから、殺して。未熟児で息が出来なくて死んだ事にすればいいでしょ。」

医者「……」

パトリシア「殺せ！できないなら私が殺してやる！」

ヨーデフ 中に入ってくる

ランデブー「どうしたんだ一体?!」

パトリシア「あなた、残念なお知らせよ。私達の子供は死んでしまったわ。」

ヨーデフ「なんだと！」

ヨーデフ キクラゲ姫の様子を見に行く

ヨーデフ「何を言ってるんだ。ちゃんと鳴いてるではないか、かわいいなー。パパでちゅよー、やっと会えたねー白雪姫。」

パトリシア「その名を呼ぶな！」

ヨーデフ「…どうしたんだ？」

パトリシア「あなたその子は死んでいるの。残念だわ。初めての子供を元気に産むことができなくて。次は絶対元気で美しい子を産むわ。」

ヨーデフ「何を言ってる、元気で美しい女の子ではないか。私達の手で立派に育てよう。」

パトリシア「…あなた白雪姫はどんな子供って話したっけ？」

ヨーデフ「え？」

パトリシア「こんなの白雪姫じゃない、私はこの子を白雪姫と認めない。」

ヨーデフ「じゃあこの子はどうするんだ？」

パトリシア「死んだ事にするの。私は本当の白雪姫に出会うの。」

ヨーデフ「本気で言っているのか？」

パトリシア「こんな時に冗談を言うとも思う？」

ヨーデフ「…」

パトリシア「殺して。」

ヨーデフ「…」

パトリシア「聞こえなかった？殺して。」

ヨーデフ 我が子を殺そうとする

ヨーデフ「…ワシにはできません。例えどんな姿をしていても我が子に変わりはない。ワシは絶対にこの子を育てる。」

パトリシア「…そう。」

ヨーデフ「それに、いくらお前が腹を痛めて産んだ子供でも、お前にこの子を殺す権利はない。」

パトリシア「…好きにすればいいわ。」

間

赤ん坊の泣き声

ヨーデフ「おーよしよしよし、大丈夫、大丈夫だ。」

シーン「ラジオ2」

キュロス「ねえあなた、世界で一番美しいのはだあれ？」

ラジオ「それはもちろんあなただ。あなたがこの世で一番美しい。」

キュロス「本当にそう思ってるの？」

ラジオ「もちろんです。あなたがこの世で一番美しい。クレオパトラよりも初音ミクよりもガンジス川よりも」

キュロス「ん、その例えはよく分からないわ。」

ラジオ「あなたは世界中の誰よりも美しいということです。」

キュロス「…ありがとう。」

ヨーデフ「キュロス、キュロスよ、見ておくれ。我が家にも遂に子供が生まれたぞ。」

キュロス 無視

ヨーデフ「おーよしよし。ほらキュロスおばちゃんだよー、ははは。キュロスもおばちゃんかー。ははは。」

キュロス「…出てって。」

ヨーデフ「ん？どうしたキュロス？可愛い可愛い姪っ子だぞー。」

キュロス「出てってよ！今、彼と話してるじゃない出てって！」

ヨーデフ「彼？」

キュロス「そうよ彼よ！あなたが殺した彼よ！よくも赤ん坊の祝福を求めに来たものかわ！」

ラジオの音声が流れる

ラジオ「…やっぱり嫌だ、こんなもの作りたくない…だって私はずっとあなたのそばにいたいんだ。」

キュロス「この声を聞いても分からない？ねえ、わからないの？いいわ。分かるまで聞かせてあげるわ。」

再びラジオを戻し再生

キュロス「ねえあなた、世界で一番美しいのはだあれ？」

ラジオ「それはもちろんあなただ。あなたがこの世で一番美しい。」

間

ラジオ「もちろんです。あなたがこの世で一番美しい。クレオパトラよりも初音ミクよりもガンジス川よりも」

間

ラジオ「あなたは世界中の誰よりも美しいということです。」

キュロス「…ありがとう。」

ヨーデフ「おまえ…カップキングと続いていたのか？」

キュロス「そうよ、何か文句でもある？」

ヨーデフ「あれほど会ってはならないと言っていたではないか。お前たちがいくら愛し合っていたとしてもそれは絶対に叶うことはない。どうせ離ればなれになる運命ならば愛が深まる前に…」

キュロス「そんなの！？国の事情じゃない。私には関係ない。」

ヨーデフ「関係ある！なぜならお前は私の義兄弟だからだ。それによりよってなぜカッパなんだ。」

キュロス「私にはあの人全てだった。切れ長の目も、生臭いところも、ちよつと黄ばんだお皿も私は全てを愛していた。」

ヨーデフ「…キュロス…」

キュロス「なんでこんな所に産まれてきたんだろう。」

赤ん坊の泣き声

キュロス「この子もきつとこの家に生まれたことを恨む時が来るわ。」

ヨーデフ「な、なんてことを言うんだ！？この子は私が絶対に幸せにする。」

キュロス「…あの人なんて言ってた？」

ヨーデフ「え？」

キュロス「最後になんて言ったの？」

ヨーデフ「…それは。」

間

キュロス「出てって。」

ヨーデフ「キュロスたまには外に出てみんなと食事でもしないか？」

キュロス「出てって。」

ヨーデフ「出て行く」

キュロス「1人になりラジオを聞き、泣き崩れる」

「7年後」

ヨーデフ一家「食事を取っている」

パトリシア「ほら白雪姫、こぼしさないの。」

白雪姫「はい。」

パトリシア「こら！またこぼしてる。わざとね、白雪姫。お母さん怒るわよ。」

白雪姫「ふふふふ。」

パトリシア「ほんとうに困った子。ふふふ。」

キクラゲ姫「2人のやりとりを見ている」

パトリシア「なにってるの？」

キクラゲ姫「いいえ、なんでもありません。」

白雪姫「ごちそうさま！」

パトリシア「あらもういいの？」

白雪姫「うん、もうお腹いっぱい！お外に行きたい！お外！」

キクラゲ姫「わ、わたしもお外で…」

パトリシア「わかったわ。ちょっと待ってね。」

パトリシア・白雪姫「外へ行く」

キクラゲ姫「ねえパパ。」

ヨーデフ「うん？」

キクラゲ姫「私って本当にママの子供なの？」

ヨーデフ「…」

キクラゲ姫「ねえパパ。」

ヨーデフ「なにを言ってるんだ、もちろんお前はパパとママの子供だ。」

キクラゲ姫「なんでママは白雪姫ばかりかわいがるの？」

ヨーデフ・ランデブー「……」

キクラゲ姫「わたしって本当にママの子供なの？」

ヨーデフ・ランデブー「……」

キクラゲ姫「……ちそうさま。」

キクラゲ姫 後片付けをする

ランデブー「ああ、いいです。私がやりますので。」

キクラゲ姫「ありがとう。」

キクラゲ姫ハケ 食事を片づけるランデブー

ヨーデフ「なあ、ランデブーよ私はどうすればいいんだ？」

ランデブー「……私には何も……」

ヨーデフ「こんなことになるなら、子供など産まなければよかった。」

シーン「キクラゲ姫の部屋」

キクラゲ姫 小さい頃もらった本を読んでいる

そして飽きる

キクラゲ姫 手を人形に見立てて遊ぶ

キクラゲ姫「はー飽きちゃった。」

手を人形に見立てて遊ぶ

ランデブー キクラゲ姫の様子を見に来た様子

キクラゲ姫「ランデブー、ノックぐらいしてよ。」

ランデブー ノックのマイム

キクラゲ姫「もう遅いわよ。」

ランデブー「ごめんなさい姫様。ノックは一応したんですけども姫様には聞こえていなかったようで……」

キクラゲ姫「あら、そうだったのごめんなさい。」

ランデブー「いえいえ、謝ることではございませんよ。姫様はなんでもすぐに謝りすぎです。」

キクラゲ姫「そうかしら？」

ランデブー「そうですよー。そんなに謝ってばかりいたら、本当に謝りたい時に自分の謝る重みを小さくしてしまいますよ。」

キクラゲ姫「でもランデブー、さっきあたしに謝った。」

ランデブー「わたしは謝ることが仕事のようなもので、重みなんて必要ないんです。あたしはいいんです。私デブだしね毛濃いいし、恋しい！あのころのすね毛のない脚が恋しい！」

キクラゲ姫「ランデブー？」

ランデブー「すいません、姫様が私を責め立てたもので。」

キクラゲ姫「え？なにそれ？わたしが悪いみたいじゃない。ランデブーすみません使いすぎて意味わかないで言ってるじゃない？」

ランデブー「すみません。」

キクラゲ姫「謝るのへたね、ランデブー。わたしもお母様に謝ってばかりだから分かるけどへたすぎよ。」

ランデブー「お嬢さんも重みを失ってしまったっていたとは。」

キクラゲ姫「でも意味は失ってないわ。わたしは人形じゃない。自分で考えて謝るの。」

ランデブー「…そうですね、人形になってはいけませんね。」

キクラゲ姫「そうよ。あ、ごめんねあなた達のことを悪く言ってるわけじゃないの。」

ランデブー「お嬢さんを元気づけるつもりが私が元気づけられてしまいました。ありがとうございます。」

キクラゲ姫「ありがとうございます…良い言葉ね。」

白雪姫が怪我をした様子

パトリシア「ランデブー！ランデブー！早く！」

ランデブー「はい！ただいま！」

ランデブー キクラゲ姫に一礼して出て行く

キクラゲ姫「また1人になっちゃったわ…」

白雪姫の怪我の処理をしているパトリシア・ランデブー

窓からそれを見ているキクラゲ姫

キクラゲ姫「白雪姫の側にはいつも誰かいるのに…」

イノシシ 奇妙なステップで入ってくる キクラゲ姫の前で一発芸を披露し去る

キクラゲ姫「毎日毎日なんなの？」

DJワタクシタワシ・チョリチョリ白雪姫の部屋の前を通る

チョリチョリ「てかさーてかさー聞いて聞いて hear me hear me ♪♪」

DJワタクシタワシ「英語カッター！これ脚気！」

チョリチョリ「**Fun!**相変わらずイカしたラップだぜ DJワタクシタワシ。ってそんな場合じゃねーんだよっつってー！」

DJワタクシタワシ「なんだYO~」

チョリチョリ「マジビックリドンキーな情報をゲットしたぜーっつってー！」

キクラゲ姫「なんかむかつく。」

DJワタクシタワシ「だからなんなんだYO~」

チョリチョリ「白雪プリンセスいるじゃない、白雪プリンセス。あれ、本当に国王と王女の子供だと思っつって??」

DJワタクシタワシ「ソリヤソウダロウYO。」
チヨリチヨリ「ところがどっこい昇天pegasus！本当は父親が違うんだよって！」
DJワタクシタワシ「本気ト書イテマジカヨ？！」
チヨリチヨリ「最初に生まれてきたキラゲ姫いるだろ？あの子が本当は白雪姫だったんだ、だけど王女様が望む様な姿で生まれる事が出来なかった！そこで王女様は今度こそ自分の思い描く白雪姫を産もうとしたんだって！」

シーン「人工授精」

医者「うーん、そうですねー。まあ出来ることは出来るんですが精子を探すのにまず時間がかかります。いつまでにご用意できるとも断言できません。それでも宜しいですか？」
パトリシア「はい、それでも構いません。」

医者「そして患者さんによって異なりますが、人工授精で妊娠する確立は平均して10から15%です。まあ確立的にも数回行っていただくというのが今の人工授精の現状です。」
パトリシア「はい。」

医者「また、自分の思い通りの子が生まれるとは限りません。それでも宜しいですか？」
パトリシア「はい。」

医者 看護師に目配せする

看護師「こちらが記入して頂く書類です。簡単な質問に答えて頂いて、同意書にサインをお願いします。」

パトリシア「はい。」

シーン「キラゲ姫の部屋2」

チヨリチヨリ「つてなわけなんだよー！やばくねー！これ昇天pegasusやばくねー！？」

チヨリチヨリ「あれ？いねーし！？ワタクシタワシー？？」

チヨリチヨリフリーズ

キラゲ姫「え？なに？わたしはお母様の思うような姿では生まれて来れなかったの？」

DJワタクシタワシ「そっやー！だから王女様は再び子供を産んだんだYOー！」

キラゲ姫「だからお母様は私に冷たいの？」

チヨリチヨリ「そうさ！親が子供にdyなんて昇天pegasusおかしい。」

キラゲ姫「でも、でも私はいいい子にしたわ、一生懸命いい子にしたわ！」

ランデブー「そんなの王女様には関係ない！」

キラゲ姫「え？」

白雪姫「おねえちゃん変ななおー。」

ヨーデフ「お前は生まれるべきではなかった。」

一同「お前は生まれるべきではなかった。」

一同嘲笑しながら出て行く

シーン「母親殺害」

キクラゲ姫 手に包丁を持って鼻歌を歌っている

パトリシア 化粧をしている

パトリシア「だれ??ノックぐらいしなさいよ。」

振り向くパトリシア

パトリシア「…どうしたの?そんなもの持って。」

キクラゲ姫「…」

パトリシア「おもちゃよね?それ?ねえ?」

キクラゲ姫「…」

パトリシア「なんとかわいいなさいよ!」

キクラゲ姫 包丁で母親を刺す

キクラゲ姫「お母様。わたしが好き?」

パトリシア「え?」

もう一度刺す

キクラゲ姫「わたしが好き?」

パトリシア「ええ勿論よ。」

もう一度刺す

キクラゲ姫「嘘。わたしなんて生まれてこなければよかったんですよ。」

パトリシア「…」

キクラゲ姫「白雪姫だけでよかったんですよ。」

キクラゲ姫「なんか言ってお母様。」

キクラゲ姫「お母様、わたしの何が悪かったの?ねえ、この鼻?この口?この目が嫌いな
の?ねえ、みんなと同じ鼻だよ口だよ目だよ。ねえ、お母様。お母様!」

パトリシア 息も絶え絶えになっている

ヨーデフ「パトリシア、今度のパーティの衣装なんだがなーどうにもしっくりくるものが
なくてだなー、どうすればいい?」

ヨーデフ「パトリシア?」

ヨーデフ「パトリシア?!」

キクラゲ姫「お父様…なんで私を産んだの?」

ヨーデフ「…」

キクラゲ姫「お父様!…答えてよ。」

しやがみこむ白雪姫

ヨーデフ「…服を脱げ。」

キクラゲ姫「え?」

ヨーデフ「いいから服を脱ぐんだ!」

強引に服を脱がすヨーデフ 戸惑うキクラゲ姫

ヨーデフ「靴もだ！」

キクラゲ姫「靴を脱ぐ ヨーデフ靴を遠くへ投げる

ヨーデフ「これでよし。」

キクラゲ姫「お父様？」

ヨーデフ「逃げる。」

キクラゲ姫「え？」

ヨーデフ「逃げるキクラゲ姫！いまはとにかく逃げて生き延びることだけを考えなさい！」
手を二回叩く イノシシ「どこからともなく現れる

ヨーデフ「こいつに乗って逃げる！後のことは私がなんとかしておく！」

キクラゲ姫「え？」

ヨーデフ「いいから逃げるんだ！今はなにも考えずに逃げるんだ！」

ヨーデフ「イノシシ！トランスフォーム！」

おんぶの姿勢になる

キクラゲ姫「ただのおんぶじゃない。」

ヨーデフ「何も考えるなどといったはずだ！」

キクラゲ姫「でもこれをトランスフォームと言うには……」

ヨーデフ「イノシシよ、後のことは任せたぞ。」

イノシシ「うなずき白雪姫をおんぶして出て行く

ヨーデフ「パトリシアよ、欲望というものは怖ろしいものだなあ。我が子をあんな目に遭わせてまで欲望を満たそうとするんだ。人間は哀れだなあ、こんなことなら感情なんでものは粗大ゴミの日にでも捨てておくんだったなあ。…楽になったかパトリシア。跡形もなく燃やしてやるからな。」

ライターに火を付ける

ヨーデフ「火つてのは妙に目に付くなあパトリシア。私は生まれたときからこの時を待ち望んでいた気がするよ。死んだ人間を燃やすつてのはそういうことなんだろうなあ。」

自らに火を付けパトリシアを抱きしめる

ヨーデフ「燃えるってのはいいもんだなあ。」

シーン「走れイノシシ」

イノシシ「これだけ離ればひとまず安心だな。」

キクラゲ姫「イノシシさん、まだお家から50mも離れてないわよ、大丈夫？グリコだったらパイナツプル10回でこれちゃうわよ？」

イノシシ「グリコだかパピコだか知らねえがとにかく落ち着け。」

キクラゲ姫「グリコっていうのはねジャンケンをしてね勝った人が前に進めるの。それもねグーで勝ったらグリコで三歩・パーで勝ったらパイナツプルで六歩・チョキで勝ったらチヨコレイトチヨコで9歩進むことができるの、チヨコレイトチヨコが一番強いわね。」

イノシシ「ああ、そうなんだ。」

キクラゲ姫「グリコもね奥が深い。チョコで勝ってチョコレイトチョコで進もうとするでしょ、でもそれが相手に読まれて……」

イノシシ「もういいよグリコの話は！」

キクラゲ姫「あら、そう。……ていうかあなた喋れるのね!？」

イノシシ「遅いよ!グリコに夢中になりすぎて俺の会話能力に気づくのが遅すぎだよ!」

キクラゲ姫「あなたイノシシよね?なんで喋ることができなのよ。」

イノシシ「おまえらは固定概念に囚われすぎなんだよ。お前ら人間は今まで与えられてきた情報に頼りすぎなんだ。だから自分で考える事が出来ないんだ。」

キクラゲ姫「難しくよく分からないわ。」

イノシシ「よくわからないって思うからよくわからない。物は考えようだ。」

キクラゲ姫「それも難しくよくわからないわ。」

イノシシ「物は考えようだ。この言葉を覚えておけ。イノシシが人間の言葉を喋った。お前の頭の中で考えることはたかが知れる。動物が喋るなんてありえない。」

キクラゲ姫「うん、そうね。」

イノシシ「だからお前らはダメなんだ。見てきた物や刷り込まれた情報だけに頼ってしまおう。」

キクラゲ姫「あんまり難しいことは言わないで。」

イノシシ「要するに全て受け入れてしまえってことだ、イノシシが喋ったっていいじゃないか、お前の中のイノシシのバリエーションが増えただけだ。」

キクラゲ姫「バリエーションなんて難しい言葉を使わないで。」

イノシシ「もっと自分で解釈しろ。本能で感じる。」

キクラゲ姫「あなた、無茶苦茶ね……」

イノシシ「俺は無茶苦茶だとは思わない、これが俺の普通だから。さあ行くぞ。」

「シーン キュロス国王」

音声が乱れたラジオの音が流れる

ランデブー ドアを叩く

ランデブー「キュロス様!キュロス様!お願いですから出てきて下さい!」

キュロス「……」

ランデブー「ヨーデフ様とパトリシア様がお亡くなりになった今、キュロス様のお力が必要なのです!このままでは、このままでは我が国は混乱の渦に呑まれ滅んでしまいます。」

キュロス「もうやめてよ!なんで私にそんなことを言うの?!」

ランデブー「……パトリシア様の妹でありヨーデフ様の義兄弟だからです。」

キュロス「あなたも義兄弟様と似たようなことを言うのね……」

ランデブー「キュロス様?？」

キュロス「なんでこんなところに産まれてきてしまったんだろう。心からそう思うわ。」
ランデブー「…それは仕方のないことです。この家に生まれたいと思って生まれてきた人などいないのですから。」

キュロス ドアの方に近づく

キュロス「そんな事わかってるわ！わかってる・・・わかってるのよ。でも心と体が追いつかないの。頭で分かっているけど追いつかないのよ。」

ランデブー「…それでも、それでも我々は生きねばなりません。受け入れたフリをしてでも生きねばなりません。ずーっとそのフリを続けていればそれが本当の自分になるのです。」
キュロス「そういうものなの？」

キュロス ドアに寄りかかる

ランデブー「人間は馬鹿な生き物ですから。」

キュロス「それでも私は嫌。そんな自分になんか出会いたくない。」

ランデブー「わがままを言っている場合では無いのです、キュロス様。…あなたがカップキング様を思う気持ちは分かります。しかしこのままこの部屋に籠もっていてもなにも変わりません。」

キュロス「・・・」

ランデブー「新しい自分が過去の自分を洗い流し、今の自分を埋めてくれるのです。」

キュロス「わたしだって洗い流せることなら洗い流したいわ！でも・・・できないの。」

ランデブー「新しい自分を望んでいないからです・・・あなたは現在を過去で埋めるのに精一杯です。しかもそれでも埋めることができている。」

白雪姫「ランデブー！ランデブー！」

ランデブー「どうしました？白雪姫様？？」

白雪姫「わたし、本当に見た！お姉様がお母様を刺したの！ブスって！」

ランデブー「またそんなことを言って・・・」

白雪姫「本当だって！わたし見たんだもん！お姉様イノシシに乗って逃げたの！」

ランデブー「はいはい、わかりました。」

白雪姫「お姉様がお母様を殺したのよ！」

ランデブー「例えそうだったとしても、3人とも死んでしまっていることに変わりはない。」

警察 どこからともなく現れる

警察「お部屋から確認できたのはヨーデフ様の王冠とパトリシア様の首飾り、そしてキクラグ姫様の靴のみ。他のものは全て燃やしてしまっています。ご遺体も本人かどうか確認できない状態です。分かっているのは・・・」

ランデブー「3人はなにかの理由で死んでしまった。わかっているのはこれだけ。」

警察「そういうことになりますね。」

警察 どこからともなく去る

白雪姫「お姉様が、お姉様が殺したのよ。だって、だってわたし見たんだもん！」

キュロス「ランデブー！」

ランデブー「はい！」

キュロス「あなた言ったわね…」

ランデブー「え？」

キュロス「あなた言ったわね新しい自分が過去の自分を洗い流してくれるって。」

ランデブー「はい。」

キュロス「あなた言ったわね今の自分を埋めてくれるって。」

ランデブー「はい。」

キュロス「国民を呼びなさい。この人生の穴埋めをするわ、偽って生きることであの人を忘れることができるならどんな仮面でも被ってやろう。私は自分で自分を失くすの。」

ランデブー「…」

キュロスの威圧感に言葉が出ない

キュロス「どうしたの？国民を呼びなさい、新国王の誕生よ。」

ランデブー「…かしこまりました！」

「シーン 森の中」

キクラゲ姫「ねえ、イノシシさん。」

イノシシ「ん？なんだ？」

キクラゲ姫「どうして私を助けたの？」

イノシシ「国王に頼まれたからさ。」

キクラゲ姫「どうして？」

イノシシ「どうしてって…あの人は俺の命の恩人だからな。」

キクラゲ姫「それも本能？」

イノシシ「本能だな、その時感じたままに動いているからな。」

キクラゲ姫「かんじたままにうごく？」

イノシシ「そうさ、感じたままに動くんだ。」

キクラゲ姫「本能ってなんだかよくわからないわね。」

イノシシ「そりゃそうだ、お前みたいなチンチクリンにはまだわからねえ。それに俺もよく分かってねえ、じゃはは！だがよく分からないで使うってのも本能ってもんだ。」

キクラゲ姫「もう全然わからない。」

イノシシ「わからねえと思うからわからねえ。お前にはお前の本能がある。解釈しろ。」

キクラゲ姫「本能はまだわからないけど…一つ分かったわ。」

イノシシ「なんだ？」

キクラゲ姫「その本能が私を助けてくれた。」

イノシシ「じゃはは、俺のヌカヅケに感謝しな。」

キクラゲ姫「ヌカヅケ？」

イノシシ「ああ俺の本能の名前さ。気に入った奴にしか教えていないが。」

キクラゲ姫「本能に名前があるの？」

イノシシ「ああそうさ、俺の可愛い本能の名前さ。お前ら人間も子供に名前をつけるだろ？それと一緒にさ。」

キクラゲ姫「一緒かなあ、でも又カヅケって。」

イノシシ「なにを笑っていやがる！すこぶる格好いいじゃねえか、又カヅケ！」

キクラゲ姫 爆笑

イノシシ「おい、俺の必死に考えた名前を笑うんじゃねえよ！俺の又カヅケが可哀想だろうが！」

キクラゲ姫「ごめんなさい、ごめんなさい。イノシシさんあなたの名前はなんなの？」

イノシシ「名前を聞くときは、まず自分が名乗るもんだ。」

キクラゲ姫「それもそうね、私の名前はキクラゲ姫。」

イノシシ「キクラゲ？」

キクラゲ姫「そう、キクラゲ姫。」

イノシシ「……じゃはははははは！キクラゲて、じゃはははは！俺の又カヅケをよく笑ってられたもんだ、じゃははははは。」

キクラゲ姫「本当はね、白雪姫って名前だったの。」

イノシシ「じゃはは、笑われたからって嘘をつかなくてもいいぞ、じゃはは。」

キクラゲ姫「本当なの、だけど私はお母様の思うような姿で生まれることができなくて……それで……それで……」

キクラゲ姫 泣く

イノシシ「おおごめんよ、笑いすぎた。」

イノシシ「すまん。まさか名前を聞いただけで泣かれるとは、冤罪にあつた気分だ……」

キクラゲ姫 少し泣き止んで

キクラゲ姫「……それでお母様は新しい子を産んだの……それが……白雪姫。それで……それであたしなんだかとても悲しい気持ちになって……それで、それでわたし……うわーん。」

イノシシ「おーよくわからんが、ほらあんまり泣くな、又カヅケ！」

キクラゲ姫「……うわーん。」

イノシシ「ああ、どうしよう。」

キクラゲ姫「わたしお母様を殺したのー。」

イノシシ「え？」

キクラゲ姫「わたしがお母さんを殺したのー、ごめんなさいーごめんなさいー。」

イノシシ「あーあー泣くな泣くな落ち着け、ひとまず落ち着け。よく分からんがなにか理由があつたんだろう、お前の本能を動かす何かがある。」

シーン 「キュロス演説」

キュロス「私の好きなもの：チョコレート・掃除・音楽・プラネタリウム。嫌いなもの：人参・ランニング・眠れない夜・お金・戦争：戦争戦争戦争：私には恋人がいました。敵国カップ共和国の人です。決して許されたい恋だった。それも国の間に戦争があったから。そしてその戦争が私の全てを奪っていった。戦争が憎い。戦争は私から全てを奪って行きました。奪うだけ奪って私には何も残らなかった。何も残らなかったけど：けど、私にはまだあなた達がいいます。同じ痛みを味わった家族がいいます：争いのない笑顔に溢れる国にしたい。みんなを笑顔にする太陽になりたい！共に痛みを味わった子供達：私が守ってあげる！」

シーン「小人登場」

ねぼすけ 新聞を読んでいる 眠りそうになりながらもタバスコを目に垂らす

くしゃみつぼい ダッチワイフで性処理している

ねぼすけ「あーーーーー！！！！！」

先生「さあ、飯でも作るかね。」

先生 フードプロセッサーに色々な物を詰め込んでスープを作る

怒りん坊「先生、今日の飯はなんだい？」

先生「今日はだね、つけ麺だね。」

怒りん坊「つけ麺！？珍しいな！いい物が手に入ったのか？」

先生「いい馬が手に入ったね。」

怒りん坊「馬??」

先生「そう、馬でスープを作ってみたね。たてがみを麺にしてみたね。つけ麺の新しい形だね。」

怒りん坊「さすが先生、発想が違うぜ！今日の飯は旨そうだ！」

先生「なっはっは、もうすぐできるからね。ちよつと待ってね。」

怒りん坊「こりやもつと腹を空かしておこう、その方が飯が旨いってもんだ！」

怒りん坊 運動する

間

先生「さあできたね！」

怒りん坊「おお、早いな！さすが先生！」

先生「くしゃみつぼい！いつまでやってんだね！飯だよ！後にしなね！」

くしゃみつぼい「でも…いまいいとこっぼい8合目まで来てるっぼい…」

先生「ねぼすけ！飯だよ！」

ねぼすけ「…(はん)はん…」

一同席に着く くしゃみつぼい 興奮が冷めない様に片手でしごいている

ねぼすけ「あーーーーー！！！！！」

怒りん坊「いい加減もつと良い方法見つけたらどうだ、ねぼすけ。」

ねぼすけ「これが一番効くんだ、おいらすぐ寝ちまうから。」

先生「おい、なにやってるんだね？」

くしゃみっぼい「ん？」

先生「なにやってるんだね？」

くしゃみっぼい「興奮が冷めないようにしてるっぼい。せっかく8合目まできたっぼい。」

先生「本当にどうしようもないね、なっはっは。」

怒りん坊「どうしようもないのが俺達の取り柄だ！がはは！」

ねぼすけ「どうしようもないけど、みんながいれば、大丈夫。」

先生「そうだね、今日もみんなが生きてる事に感謝して飯といこうかね。」

一同両手を合わせる

先生「いただきますする。」

一同「いただきますする。」

一同「ご飯を食べる くしゃみっぼい 黙々と食べている

怒りん坊「なんじゃこりや！うまさ滅茶苦茶だ！」

ねぼすけ「ほ、ほんとうに……」

ねぼすけ「眠ってしまい顔をスープに突っこむ

ねぼすけ「あ……」

先生「うるさいね、うまいのかわからんね。」

怒りん坊「うまいぜこりや！」

先生「そうかね、よかったよかった。」

くしゃみっぼい「ちそうさまする！」

先生「おお、早いねくしゃみっぼい。」

くしゃみっぼい「すぐさまダッチワイフの所へ

先生「……本当にどうしようもないね、なっはっは！」

一同笑う

シーン「チヨコレイトチヨコ」

キクラゲ姫「チ・ヨ・コ・レ・イ・ト・チ・ヨ・コ！ほら、早くイノシシさん！」

キクラゲ姫「最初はグー、ジャンケン、ぼい！」

イノシシの手だけ見える

イノシシ「ぐ・り・こ」

イノシシ「くそ！なんだこの遊びは。両足の自由を塞がれるとは、とんでもねえ。」

キクラゲ姫「いくよー！最初は……」

イノシシ「ちよっと待てキクラゲ姫、もうそろそろやめねえか。この遊びは進むのに時間がかかってしょうがねえ。」

キクラゲ姫「え……」

イノシシ「それに俺の脚が限界だ、ここらへんで休憩したいとこだが…」
辺りを見渡す

イノシシ「おっ！こんな所に家があるぞ！休みたいときに休めるとは、なんていい台本だ。」
イノシシ「キクラゲ姫、ここで少し休憩しよう。」

キクラゲ姫「…はい。」

イノシシ「すいません！」

変人達 騒いで気づかない

イノシシ「すいませーん！」

変人達 騒いで気づかない

イノシシ「まあいい、入ってみよう。」

イノシシ・白雪姫 変人宅に入る

イノシシ「…キヤーー！」

イノシシ「な、なにしてんだよ、こんなところで！」

くしゃみつぼい「待ってくれ、いいところっぽい、もうすぐ頂上つぼい。」

イノシシ「こいつ何言ってるんだ。」

ねぼすけ「ごめんね、おどろかせちゃ…」

ねぼすけ タバスコを目に入れる

ねぼすけ「あー！」

イノシシ「キヤーー！」

怒りん坊「うるせーな。ていうかだれだお前？？勝手に入ってきやがって。」

イノシシ「…人に名前を聞くときは自分から名乗るもんだ…」

怒りん坊「なんで勝手に入って来た奴に俺から名前を名乗るんだよ！それにお前どう見たって人間じゃねーだろーが！タコ！」

イノシシ「タコじゃないイノシシだ。お前の目は節穴か。」

怒りん坊「そういうことじゃねーよ！」

先生「まあまあ、落ち着きなされ。落ち着きなされ。」

先生「それでタコさんはどうしてここに…」

イノシシ・怒りん坊「タコじゃねーよ！」

キクラゲ姫 くしゃみつぼいを近くで見ている

キクラゲ姫「ねえ、なにしているの？」

イノシシ「見てはだめだ、キクラゲ姫！」

怒りん坊「キクラゲ姫？？」

先生「これはこれはどこかのお姫様かな？」

キクラゲ姫「…はい、あの、その…お姫様をやっております。」

先生「ほー偉い人が来たもんだね。してどうしてこんな所へ？」

キクラゲ姫「それは…」

ねぼすけ「どうしたんだい？」

イノシシ「こいつの本能がここに向かわせたんだ。それでいいじゃねえか。」

怒りん坊・ねぼすけ「本能？」

くしゃみっぼい「ああああ！ご来光っぼい……」

頂上に達した様子

先生「まあいいね。なにか事情があったんだね。とりあえずここでゆっくりするといいね。」

怒りん坊「先生いいのか！？こんなワケの分からないやつら。」

先生「いいんだね。人は多い方が楽しいね。」

怒りん坊「でも……」

イノシシ「あの一、イノシシ……」

先生「怒りん坊、お前が来た時はどうだった??」

怒りん坊「……」

先生「困った人がいたら助けるもんだね、そうだね？」

怒りん坊「……はい。」

イノシシ「あの一、イノシシ……」

先生「キクラゲ姫や、ここで休んでいくといいね。」

キクラゲ姫「……ありがとうございます。」

イノシシ「あの、俺はどうなんだ？」

先生「もちろんいいね、この子には君が必要そうだね。……イノシシが喋った？」

イノシシ「大分前から喋ってるけどな、なんか文句あるのか？」

先生「なっはっは。姫様に喋るイノシシとはこいつは斬新な出会いだね、愉快だね。こ……」

でゆっくりしていきなね。」

イノシシ「ありがとう、恩に着る。」

先生「とにかく今日は休むといい、早く風呂に入って寝ることだね。」

シーン「第二の人生」

ランデブー「キュロス様?!どうでした??」

キュロス「なんとかカツパ共和国と休戦協定を結ぶ事ができたわ。これで戦争がまたひとつ減る。」

ランデブー「キュロス様、お疲れ様でした。」

キュロス「国民の国離れもなんとか食い止められたわ。きつと心が豊かになったからよ。戦争が減った分、豊かな生活はできなくなったけど彼らにはそれを満足させられる家族という安心がある。」

ランデブー「そうですね。それもキュロス様が毎日、各家庭を訪問しているからです。」

キュロス「……わたしも救われているのだけれどね……」

ランデブー「え?」

キュロス「ありがとう、ランデブー。あの時のあなたの言葉がなければ今の私はいないわ。」
ランデブー「そんな、私はたいしたことは致しておりません。」

キュロス「言葉とは怖ろしいものね、こんなに人を変えてしまうのだから。」

白雪姫 民衆へ向けて叫んでいる

白雪姫「みんな聞いて！わたしあの日見たの！私のおねーちゃんがパパとママを殺したんだ！私の大事なものを奪っていったの！あいつは必ず生きてる！あいつを探すべきなのよお！」

ランデブー「またあんな事を言って…」

キュロス「あの子も可哀想な子。前に進めないんだわ。」

ランデブー「あの子は本当に可愛がられてましたから…」

キュロス「以前の幸せが大き過ぎたのね…私を見ているよう…」

キュロス「あら、もうこんな時間。ランデブー行くわよ。」

ランデブー「はい。」

白雪姫「いつまでもそこにいられると思うなよ。」

シーン「小人の朝」

先生「ふああ、もう朝かね。眠いね。」

先生「こんなに雑に置いて…もう仕方ないね…」

先生周囲を気にしつつ陰部をダッチワイフに当てる

キクラゲ姫が入って来る

間

目が合う2人 先生 腰の動きに合わせてかけ声を付ける

先生「い、1・2・3・4・5・6・7・8 いやーやっぱ朝は腰振り体操に限るねー」

キクラゲ姫「…」

無言で近づく

先生「キクラゲ姫もやってみるかい？」

キクラゲ姫「…うん…」

先生・キクラゲ姫「1・2・3・4・5・6・7・8」

先生「ああ、みんなおはようね。」

怒りん坊・くしゃみっぼい「なにやっつてんの？」

先生「なにして毎朝やっつてる腰振り体操だね。みんなもやるかね？」

怒りん坊「そんなのやっつてないだろ？」

先生「やるかね?!」

怒りん坊・くしゃみっぼい「はい！」

先生「月に要と書いて腰♪体の一番大事な所♪腰♪腰♪アーエッホエッホッホエー」

イノシシ「キヤー！朝からなにやっつてんだ!!」

先生「なにとって朝の運動だね。」

キクラゲ姫「イノシシさんも一緒にどう？楽しいよ。」

イノシシ「やるわけないだろ！」

先生「これをやらねば家に置いとくわけにはいかんね。」

イノシシ「なん…だと?！」

先生「やるかね?？」

イノシシ「…わかった、やってやるよちくしょう！母さん汚れていく息子を許してくれ。」

先生「ではいくね。」

先生「腰は大事♪大臣より大事♪腰♪腰♪腰を据える♪本腰入れる♪腰は大事な場面で役立つ♪腰♪腰♪」

先生「腰振り体操第二♪」

イノシシ「二番もあんのかよ！」

先生「なっはっは！初めてだし今日はこころ辺にしておこう。運動したことだし飯にしよ
うか。」

怒りん坊「飯だ！今日の朝飯はなんだい?!」

先生「今日は鮭だね。」

怒りん坊「ここであえて普通の鮭か！発想が違うぜ！」

先生「さあ、みんな準備しなね。キクラゲ姫とイノシシは座ってなね。」

くしゃみつぽい「あれ？ねぼすけがないっぽい。」

先生「あいつは本当にどうしようもないね。」

先生ハケ

ねぼすけ「あー！」

先生・ねぼすけ入り

先生「ほら、飯だね。ねぼすけ。」

怒りん坊・くしゃみつぽい 料理を並べる

先生「よし、準備は整ったね。それでは今日もみんなが生きていることに感謝して。」

先生「いただきます。」

全員「いただきます。」

キクラゲ姫・イノシシ どこか違和感を感じる

イノシシ「これ鮭か？」

先生「メダカだね。」

イノシシ「また嘘か！」

先生「姫様の前だと見栄を張ってしまうね。なっはっは。」

怒りん坊「先生の悪い癖だ。がっはっは。」

キクラゲ姫「…おいしい。こんなの初めて食べた！」

怒りん坊「アバンギャルドだろ！うまさ滅茶苦茶なんだ！」

イノシシ「…ほんとだ、おいしい。」

先生「なっはっは。そりゃよかったね。」

くしゃみっぼい「キクラゲ姫、これもおいしいっぼい。」

キクラゲ姫「あ、ありがとう。」

くしゃみっぼい「どう？」

キクラゲ姫「うん、おいしいわ。」

怒りん坊「これもアバンギャルドでうまさ減茶苦茶なんだ、食べてみる。」

キクラゲ姫「ありがとう。」

怒りん坊「どうだ??」

キクラゲ姫「まだ食べてないわ。」

ねぼすけ「これもおいしいんだよ。山奥でしか取れない貴重な食べ物なんだ。」

イノシシ「食べたかったら自分で食べるよ！お前ら田舎の母ちゃんか！」

先生「キクラゲ姫。無理して全部食べなくていいからね。」

キクラゲ姫 頷く

キクラゲ姫「ちよつと聞いてもいい？」

先生「ん？なんだね？」

キクラゲ姫「ずっと不思議だったんだけど、いつも4人でくらしているの？」

先生「そうだね。」

キクラゲ姫「あ、そうなんだ。ベッドが7つあるからまだ人がいるのかと思っちゃった。」

変人達 沈黙

キクラゲ姫「あ、わたしなんか言っちゃいけないこと言っちゃったかしら…。」

先生「…本当は7人いたんだね。」

怒りん坊「俺達にはあと3人仲間がいたんだ。最高の仲間が…。」

くしゃみっぼい「ご、ごめんっぼい…。」

くしゃみっぼい 泣きながら出て行く

ねぼすけ「ほ、本当にいいやつらだったんだ。名前はお色気、僕たちのマドンナだった。

くしゃみっぼいはお色気の事が好きだったんだ…。」

ねぼすけ「高所 sex に憧れて、脚を滑らせてそのまま死んじゃったんだ。」

怒りん坊「もう1人は Bダッシュ。車のタイヤを見ると追いかけてしまう癖があつてよ。

アバンギャルドな奴だったぜ。」

怒りん坊「タイヤを追いかけてどっかいちまった。」

先生「最後は鈴木。本当に普通なやつでな。鈴木だった。知らない間に消えちまった。」

イノシシ「本当に仲間だったのか？」

先生「もちろんさ、どうしようもないやつらだが最高だったね。一緒にいることが当たり前

前だったね。」

くしゃみっぼい「もう終わったっぼい?…。」

先生「ごめんね。くしゃみっぽい、古傷をえぐるようなことしちゃったね。」

先生「ところでキクラゲ姫とイノシシや。ここに来て一週間になるが、君たちはこれからどこに行く予定があるのかね？」

キクラゲ姫「いえ、特に。」

イノシシ「俺はこの子を安全に見守る事ができればなんだっていい。」

先生「そうかい、もしここで暮らすようなら一緒に働いてもらわねばならん。黙っても飯は食えないからね。いいかね。」

キクラゲ姫「はい。」

イノシシ「本当にいいのか？」

キクラゲ姫「うん、わたしこんなに人に優しくされたの初めてなの。ここでみんなと一緒に暮らしてみたい。」

イノシシ「キクラゲ姫がいいならいいが：：なら俺もここでしばらく働こう。俺はまだこいつらを信用してないからな。」

先生「それではキクラゲ姫には家の家事をやってもらおう。初めはねぼすけに教えてもらいなね。イノシシは私達と一緒に鉱石を掘ってもらおう。それでいいかね？」

キクラゲ姫「はい！わたしががんばる！」

イノシシ「わかったよ。」

先生「みんな喜べ！新しい仲間の誕生だね！」

一同 騒ぐ

先生「おっと騒いでいる場合じゃなかったね。働かないとね。それではみんないくよ。」

一同「おう！」

先生「家の事はたのんだよ、キクラゲ姫。」

キクラゲ姫「はい！」

先生「ねぼすけ、キクラゲ姫を宜しくね。」

ねぼすけ「はい！」

先生「それでは、いってきまする！」

一同「いってきまする！」

変人達 発掘作業に向かう

キクラゲ姫・ねぼすけは家の家事を行う

この間に5年の月日が流れる

先生「ただいまだね。」

一同「ただいまだね！」

キクラゲ姫「おかえりなする！」

怒りん坊「いやー今日は大漁だったぜー！」

袋からお金をばらまく

キクラゲ姫「わあ、凄い！」

くしゃみっぼい「今日の晩飯はなにっぼい？」

キクラゲ姫「今日はヨーグルトの揚げ浸しよ。」

怒りん坊「なんてアバンギャルドだ、滅茶苦茶だ！」

くしゃみっぼい「今日のご飯もうまそうっぼい！」

キクラゲ姫「ちよっと待っててね、いまチンしてくるから。」

怒りん坊「さらにチンするのか、滅茶苦茶だ！」

くしゃみっぼい「チン…」

先生「ねぼすけや大丈夫かね。もう風邪を引いてずいぶん経つんだがね。」

キクラゲ姫「そうなの、いつもなら寝ると直るんだけど…」

先生「それにベッドで寝ればいいのにね。」

ねぼすけ「き、キクラゲ姫のそばがいいんだ…」

先生「そうかね、そうかね、なっはっは！キクラゲ姫、君は僕らの太陽だね。」

キクラゲ姫「太陽？」

くしゃみっぼい「キクラゲ姫がいるだけで笑顔になれるっぼい！」

怒りん坊「がっはっは！太陽か！そいつはいい！」

キクラゲ姫「ありがとう…本当に、ありがとう。」

キクラゲ姫泣く

ねぼすけ「泣かないっぼい、キクラゲ姫。」

キクラゲ姫「ごめんね、ありがとう…」

レンジの音

キクラゲ姫「…さあ、ご飯にしましょう！」

キクラゲ姫 食事の準備をする

先生「それでは今日もみんなが生きている事に感謝して。いただきます。」

一同「いただきます。」

キクラゲ姫「どう？」

怒りん坊「おう！こいつは旨さが滅茶苦茶だ！」

くしゃみっぼい「…おいしいっぼい。」

先生「こりや驚いたね…五年間で腕を上げたねキクラゲ姫。」

キクラゲ姫「ありがとう、他にもあるわよ。これはタンポポの刺身。新鮮な内に食べて」

先生「こいつは斬新だね。」

キクラゲ姫「どう??」

先生「まだ食べてないよ。」

キクラゲ姫「これはどう？チキンばんばん！チキンをばんばんしてみたの！」

怒りん坊「食べたかったら自分で食べるよ。お前は、」

一同「田舎の母ちゃんか！」

一同 笑う

くしゃみっぼい「一緒に暮らす内に僕たちに似たっぼい……」
怒りん坊「イノシシの気持ちがあんなに分かったよ。がっはっは。」

先生「懐かしいね。イノシシ。あいつはよく働くやつだった。」
キクラゲ姫「イノシシさんは本当に優しいひ、……イノシシだった。」

くしゃみっぼい「お前らのことは信用出来る！俺の本能がそう言ってるんだ！間違いない！キクラゲ姫を頼んだぞ！」

ねぼすけ「そ、そう言っ出て行っちゃったね……」

キクラゲ姫「今頃、なにしてるのかしら……」

怒りん坊「きっと本能のままに生きてるさ、がっはっは！」

先生「なっはっは、みんな今日は酒でも飲まんかね？ワシの本能が酒を求めている。」

怒りん坊「そいつはいい！ねぼすけが風邪をひいてる時に酒を飲むってのも斬新だ！」

ねぼすけ「……僕も飲む……」

キクラゲ姫「ダメよ、風邪を引いているんだから。」

ねぼすけ「お願いだ……キクラゲ姫……」

キクラゲ姫「……」

先生「少しなら酒は体にいいんだね。キクラゲ姫、少しだけだね。いいかね？」

キクラゲ姫「……分かったわ、少しだけよ。」

くしゃみっぼい「宴っぼい宴っぼい！」

怒りん坊「野郎ども！宴の準備だー！かかれー！」

一同「おー！」

一同 賑やかに宴をする

シーン「僕はオージ」

オージ「やばい疲れた、もういやだ。帰りたい。」

オージ「ん？家？丁度良いここで休ませて貰おう。」

オージ 変人宅に入る キクラゲ姫と目が合う

オージ「はうあッ！！！」

オージ 気絶し倒れる

ねぼすけ「な、なんだこいつ！」

怒りん坊「アバンギャルドだ……」

くしゃみっぼい「男っぼい？」

キクラゲ姫「大丈夫かしら。」

先生「さすがのわしらもこんなやつは初めて見るね……」

くしゃみっぼい「水でもかけてみるっぼい？」

ねぼすけ「いやこんな時にはこいつが一番だよ。」

オージの目を無理矢理開けてタバスコを垂らす

オージ「ギャー！」

オージ「はあはあ、一体何が起こったんだ。いやだ…帰りたい。」

キクラゲ姫「大丈夫??」

オージ「あ、あなたはマイプリンセス！」

オージ 手の平にキスをしようとする

怒りん坊「お前、キクラゲ姫になにしようとしてんだ！」

オージ「キクラゲ姫というのか…」

怒りん坊「おまえなにもんだ!？」

オージ「僕か、僕の名前はオージ。カッパ共和国のプリンス、オージだ！」

先生「カッパ共和国？」

キクラゲ姫「カッパ共和国…なんだか聞いたことがある…」

くしゃみっばい「キクラゲ姫知ってるっばい??」

キクラゲ姫「いえ、聞いた事があるだけ…詳しいことは分からないんだけど…」

怒りん坊「でもお前どうみてもカッパじゃないだろ。」

オージ「…」

怒りん坊「なんとか言えよ。」

オージ「これには深い事情があるんだ…」

先生「無理に言う必要はないね…」

オージ「いや言わせてくれ、キクラゲ姫にも知っておいて欲しいから。」

オージ「…僕の父上はカッパ共和国の王カッパキング。父上は人間に恋をしてしまったんだ…どこの誰か分からないんだけど…その2人の間に生まれおちたのが僕、オージ…」

先生「カッパと人間のハーフってことかい？」

オージ「うん、そういうことになるね。」

ねぼすけ「で、でもカッパと人間って子供産めるのかな？」

オージ「うーん、話せば長くなるんだけど…」

カッパ研究会委員長 どこからともなく現れる

カッパ研究会委員長「どーも、カッパ研究会委員長の皿田皿子でございます。今、話になっっているカッパの生殖に関してご説明致します。まずカッパの体の仕組みですがカッパは男女ともに子宮を持っております。なので一度の交尾でカッパは2人子供を生むのが通常です。お互いの精子・卵子を半分ずつ分け合い受精するのです。それが今回はカッパと人間が交尾をしてしまった。その際に、カッパの方が人間の卵子を全て子宮に取り込んでしまったためにカッパのみ受精してしまっただけです。こうしてカッパと人間のハーフが生まれたのです。私達の記録によりますとカッパキングは死ぬ間際に子供を出産したと。このことからカッパはゴキブリと同じく死ぬ間際に子供を出産する能力があることが分かりました。」

カッパ研究会委員長 どこからともなく去る

くしゃみっばい「わかったっばい。」

先生「それでカップ共和国のオージがなんでこんな所に？」

オージ「この先にあるリンゴ王国と僕のカップ共和国が休戦協定を結んだんだ。今、お互いが良い関係を築こうとしている。そのためにカップ共和国のプリンスの僕とリンゴ王国のプリンセス白雪姫を結婚させようってことになって……」

先生「ほうほう、リンゴ王国に向かっていたのだね。」

オージ「うん、それで少し休もうと思ったら……キクラゲ姫に出会ったんだ！」

キクラゲ姫「リンゴ王国って……私がいたところだわ……」

一同「え？」

キクラゲ姫「隠していたわけじゃないの……ただ……あまり思い出さたくないことだったから……」

オージ「キクラゲ姫はリンゴ王国の人なのかい？」

キクラゲ姫「まあ、元々は……」

オージ「それなら話は早い、僕と結婚しよう！」

キクラゲ姫「え？」

怒りん坊「何を言ってるやがる！馬鹿じゃねえのか！」

ねぼすけ「そ、そうだそうだ！」

くしゃみっぼい「おまえみたいになくわからない奴にキクラゲ姫は渡せないっぼい！」

先生「まあまあ、落ち着きなされ落ち着きなされ。……オージよ、お前さんは白雪姫と結婚するためにリンゴ王国へ向かっているんだね。白雪姫のことはどうするんだね？」

オージ「ああ、そうなんだけど……僕はもう運命の人に会ってしまったんだ……」

先生「そうは言ってもだね……」

オージ「僕は……僕はキクラゲ姫を必ず幸せにする！リンゴ王国の人なら問題ないはずだし。言葉では表せない何か僕を動かしている、僕はこれが恋だと確信している！僕と結婚してくれ！」

キクラゲ姫「そんな、出会って一日も経ってない人と結婚だなんて……レイプされた気分わ……」

オージ「……仮にこれをレイプとするなら、これは神聖なレイプだ、愛のあるレイプなんだ！

僕とレイプしてくれ！」

キクラゲ姫 出て行く

怒りん坊「キクラゲ姫！……お前言ったこと無茶苦茶だぞ。」

怒りん坊 出て行く

オージ「恋は無茶苦茶なものだと父上のお腹の中で教わった！僕は今、恋をしている！キクラゲ姫、僕はどこまでも君を追いかける！」

くしゃみっぼい「キクラゲ姫をこんなやつと結婚なんてさせないっぼい！」

ねぼすけ「そ、そうだ結婚なんてさせない。」

くしゃみっばい・ねぼすけ「行かせない！」
くしゃみっばい「ばい」

オージ「なんで邪魔をするんだ！僕は彼女のそばにいたいんだ：少しでも早く返事を聞きたいんだ。」

くしゃみっばい「お前みたいなのをキクラゲ姫にちかづけさせないっばい！」

オージ「君達のどこにちかづけさせない権利があるんだ！」

くしゃみっばい「：：：こっばい。」

心臓に手を当てる

オージ「：：：僕の中にはキクラゲ姫に会う権利がある：：：」

心臓に手をあてる

ねぼすけ「会ったばかりの奴にそんな権利はない！」

オージ「君になにがわかる？！会ったばかりの君に僕の何がわかる？！こんな気持ちは初めてなんだ：：：お願いだキクラゲ姫に会わせてくれ：：：」

先生「：：：ここで待つといいね。」

くしゃみっばい・ねぼすけ「先生？」

先生「キクラゲ姫は動揺しているね、今は会わない方がいいね。キクラゲ姫が落ち着くまで、ここで待つといいね。」

ねぼすけ「で、でもこんなわけわからないやつ。」

先生「出会ってばかりでよくわからないのは私達だけじゃないね。」

ねぼすけ「で、でも：：：」

先生「初対面で愛のあるレイプなんて言うやつはなかなかいないね。アバンギャルドでいいじゃないね。」

くしゃみっばい「アバンギャルドっばいけど：：：」

先生「気持ちの伝え方が下手なだけかもしれないね。分からないものを拒んでいては糞じじいになっちゃうね。そうはなりたくないんだね？」

ねぼすけ「：：：そ、それはいやだ。」

くしゃみっばい「そうはなりたくないっばい。」

先生「そうだねそうだね。オージね、キクラゲ姫の返事が聞けるまでここでゆっくりしていくといいね。」

オージ「ありがとう。恩に着る。」

先生「うんうん。いっぱい恩を着て誰かに着せてあげてね。」

オージ「僕、みんなと恩を着回すよ。」

先生「まあまあ今日はお疲れのようだからね、ご飯でも食べなね。」

オージ「ありがとう。恩の重ね着だ：：：」

先生「とりあえず飯の準備をしようかね」

シーン「湖」

キクラゲ姫 ゆったりと湖を眺めている

キクラゲ姫「月に要と書いて腰♪体の一番大事な所♪腰♪腰♪アーエツホホエツホツホエー……うふふ……」

キクラゲ姫「腰は大事♪大臣より大事♪腰♪腰♪腰を据える♪本腰入れる♪腰は大事な場面で役立つ♪腰♪腰♪」

怒りん坊 キクラゲ姫を見つける

怒りん坊「キクラゲ姫！……なにしてるんだ？」

キクラゲ姫「腰振り体操。ここでやるととっても落ち着くの。一緒にどう？」

怒りん坊「やるわけねえだろ……それより、大丈夫か？」

キクラゲ姫「うん、もう大丈夫。」

怒りん坊「そうか……ならよかった……」

キクラゲ姫「怒りん坊……怒りん坊……うふふ」

怒りん坊「どうしたんだ？」

キクラゲ姫「ううん、あなたとっても優しいのに怒りん坊。うふふ。」

怒りん坊「いきなりなんだよ、それに名前を馬鹿にするんじゃねえよ。」

キクラゲ姫「ごめんね……でも私の名前の方が笑えるのよ。キクラゲ姫よ……色黒でキクラゲ姫……笑っちゃおう。」

怒りん坊「そうか？」

キクラゲ姫「そうよ……普通笑うわよ……でもあの人はクスリともしなかった……」

間

怒りん坊「キクラゲ姫……俺の一族はオコリ一族、気性が荒い一族で有名だ……窃盗・強姦・人殺し、力を利用してなんでもやる一族……」

キクラゲ姫「そうだったの……」

怒りん坊「でも、俺はわからなかった。奪った飯を食っても全然おいしくないんだ。それから俺は自分の生きたいように生きた」

キクラゲ姫「……」

怒りん坊「おれは一族からのけものにされた……こんなやつオコリ一族じゃないって……そこで行き着いた先がここさ。」

怒りん坊「ここではそのままの俺を受け入れてくれた、おれがおれでいることができた。先生にはこっぴどく言えないが本当に感謝してる。」

キクラゲ姫「怒りん坊……わたしもそんな場所を見つけた気がするの……」

怒りん坊「そうか……恋ってのは怖ろしいものだな……ちくしょう」

キクラゲ姫「恋に公式は無いのよ……」

怒りん坊「……」

キクラゲ姫「……月に要と書いて腰♪体の一番大事な所♪腰♪腰♪アーエツホホエツホツホ

エー……いふふ……」

怒りん坊「キクラゲ姫？」

キクラゲ姫「……最後にここでやっておきたいと思って……」

怒りん坊「……」

怒りん坊「腰は大事♪大臣より大事♪腰♪腰♪腰を据える♪本腰入れる♪腰は大事な場面で役立つ♪腰♪腰♪腰振り体操第2―」

怒りん坊・キクラゲ姫笑いながら踊る

シーン「別れ」

変人達 眠りかけている

キクラゲ姫・怒りん坊 戻って来る

キクラゲ姫「ただいまだね！」

怒りん坊「ただいまだね！」

間

キクラゲ姫「あれ？みんな寝てる？きゃっ。」

オージ「君の匂いがした……キクラゲ姫。」

オージ「貧乏くさい女の匂い、ああ素晴らしい。君は貧乏くさいの最上階に貧乏くさく佇んでいる、なんて貧乏くさいんだ！」

くしゃみっぼい「キクラゲ姫っぼい！」

ねぼすけ「き、キクラゲ姫！」

キクラゲ姫のそばにいく

ねぼすけ「だ、大丈夫？怪我とかしてない？」

くしゃみっぼい「心配したっぼい！心配したっぼい！」

キクラゲ姫「ごめんね、ありがとう大丈夫よ大丈夫。」

オージ「もう独走状態だ！最上階の更の上！ロケットに乗って天空を駆け抜けている、ラシナーズハイだ！」

先生「またアバンギャルドな事を言ってるね。ああ、お帰りキクラゲ姫。」

キクラゲ姫「ただいま先生。……あの、みんなに言いたいことがあるの……」

先生「……結婚するのかね？」

キクラゲ姫「え？」

先生「キクラゲ姫の事はなんでもお見通しだね。なっはっは。」

キクラゲ姫「先生……この人の目はね、みんなと同じ目の。……まっすぐな目。そりや最初はレイプなんて言われてびっくりしたけど……今はレイプされてもいいと思える……」

先生「そうかね……」

ねぼすけ「初めはって、会ってまだちょっとしか経ってないじゃないか、そんな人と結婚なんて。」

キクラゲ姫「理屈じゃないの！恋に公式はないの！」

心臓に手を当てる

キクラゲ姫 オージの前に行く

キクラゲ姫「オージ…私をレイプしてください！」

オージ「キクラゲ姫…ありがとう…全身全霊でチミをレイプする！」

キクラゲ姫を抱きしめる

オージ「そうと決まれば善は急げだ、急ぎに急ぐぞキクラゲ姫！」

キクラゲ姫を連れて帰ろうとする

キクラゲ姫「あ、ちよつと待ってみんなに挨拶させて。ちゃんと挨拶がしたいの。」

オージ「うん、わかった。」

キクラゲ姫「くしゃみっぼい。あなたは本当にぼいぼいばかり言って時々意味が分からない時があったわ。」

くしゃみっぼい「癖だから仕方ないっぼい。」

キクラゲ姫「うふふ、そうね。くしゃみっぼい…ありがとう…」

キクラゲ姫「ねぼすけ、あなたは私に初めて家事を教えてくださいました。何にもわからない私に一から教えてくれた。本当にありがとう…」

ねぼすけ「わ、別れの挨拶なんてしたくない！」

キクラゲ姫「ねぼすけ…ねぼすけこつちを向いて。」

無理矢理正対させる

キクラゲ姫「ねぼすけ…ありがとう…」

ねぼすけ 泣く

キクラゲ姫「怒りん坊…こつちを向いて怒りん坊…」

怒りん坊「うるせえなあ！とつと出て行ってんだ！」

キクラゲ姫「怒りん坊…無理に怒らなくていいのよ。」

怒りん坊「止める暑苦しい！」

キクラゲ姫「あなたは本当に優しい人。大丈夫、分かってる、分かってるからね。…ありがとう…」

怒りん坊「うるせえ、あつちいけ！」

キクラゲ姫「…ありがとう…」

キクラゲ姫「先生、こんな私を受け入れてくれてありがとう。見ず知らずの私を受け入れてくれてありがとう。」

先生「ありがとうはこつちの台詞だね。君は私達に光をもたらしたね。毎日が太陽サンサンだったね。」

キクラゲ姫「…ありがとう…これしか出ない…ごめんね…ありがとう…」

先生「幸せになるんだね、そしてみんなを幸せにするんだね。」

キクラゲ姫「ありがとう…わたし幸せになる、幸せにする！」

先生「それじゃあキクラゲ姫、さよならだね……」

キクラゲ姫「……うん……みんな本当にありがとう、また来るね絶対絶対絶対またくるね。」

先生「うんうん、いつでも遊びにおいで。」

キクラゲ姫「ありがとう……それじゃ、わたしいくね。」

先生「ああ、そうだキクラゲ姫保険はどうするかね？」

キクラゲ姫「え？」

先生「今までは私の扶養ってことってことで社会保険に入っていたけど、オージと結婚すると扶養が取れてしまうね。」

キクラゲ姫「ああ、そうね。オージは何の保険に入っているの？」

オージ「家はみんな国民保険に入っている。」

キクラゲ姫「じゃあ私も国民保険に入るしかないわね。」

先生「なにが起こるかわからなからね。保険はちゃんと入るんだね。」

キクラゲ姫「うん、最後まで私のことを考えてくれてありがとう。」

先生「なっはっは私達はいつでもキクラゲ姫のことを考えているね。」

キクラゲ姫「ありがとう……それじゃあ、行ってきまするー！」

先生「行ってらっしゃいだね。」

オージ「じゃあ、行こうキクラゲ姫。いち早くこの幸せをみんなに伝えたい。」

再びおんぶされるキクラゲ姫

キクラゲ姫「行ってきまする……行ってきまする……行ってきまする……」

客席へ移動しながら

ねぼすけ「キクラゲ姫ー！キクラゲ姫ー！」

くしゃみつぼい「キクラゲ姫またくるっぼい！絶対またくるっぼい！」

怒りん坊「ありがとう！ありがとう！キクラゲ姫！」

去り際 キクラゲ姫「みんなありがとう！国民保険になるけどわたしががんばる！掛け捨てじゃない！きっと将来帰って来る！おつきくなってみんなを照らすから！」

シーン「電話」

キュロス「……はい……はい……わかりました……オージ様の行方が分かり次第またご連絡ください……失礼します。」

電話を切る

キュロス「……一体どうなっているのよ……」

シーン「結婚通知」

白雪姫 郵便物を手にとる 不敵な笑みを浮かべてスキップで去っていく

シーン「デモ運動」

白雪姫「デモ隊を見てにやにやしている

デモ番長「キクラゲ姫を殺せー！」

一同「キクラゲ姫を殺せー！」

デモ番長「ヨーデフ国王とパトリシア王妃を殺した罪を償えー！」

一同「償えー！」

キュロス「どうして…キクラゲ姫は死んだのではないの…」

ランデブー「私もこの通知を貰った時は、言葉が出ませんでした。」

キュロス「このままでは、仮面がはがれてしまう…させない…絶対に…」

ランデブー「キュロス様…」

白雪姫「毒リンゴを持って楽しそうに現れる

白雪姫「キュロスおばちゃん。」

ランデブー「白雪姫様」

キュロス「…何しにきたの？」

白雪姫「ひどーい。可愛い姪っ子にそんな言い方はないんじゃない？」

キュロス「いま忙しいの。出てってちょうだい。」

白雪姫「わー外大変なことになってるねー、殺せーだつてー。」

キュロス「キクラゲ姫…キクラゲ姫…」

白雪姫「…殺しちゃえば…」

キュロス「え？」

白雪姫「本当に殺しちゃえばいいんだよ。キクラゲ姫。」

毒リンゴを出す

白雪姫「これなーんだ？」

シーン「パレード」

オージとキクラゲ姫が歩いている

子供1「結婚おめでとうございます！」

キクラゲ姫「ありがとう。」

子供2「キクラゲ姫様、よかったらこれ貰ってください！一生懸命作ったの！」

折り紙で作った鶴を渡す

キクラゲ姫「あら、凄いわねー！ありがとう。」

オージ「すっかり人気者だな。」

子供3「キクラゲ姫様！これも貰って！」

キクラゲ姫「まあ、おいしそうなリング…ありがとう。」

子供3「いま食べて！」

キクラゲ姫「え？」

子供3「新鮮な内に食べてっておじいちゃんが言ってた！」

キクラゲ姫「あら、そうなの。じゃあいただきますおうかしら。」

リンゴを食べる

キクラゲ姫「うん、凄くおいしい！」

子供3「やったー！！おじいちゃんに言っておよー！」

オージ「可愛い子だな……」

キクラゲ姫 膝を突く

オージ「キクラゲ姫？」

キクラゲ姫「だいじょうぶ……ちょっとくらっとして……」

倒れる

オージ「キクラゲ姫！？キクラゲ姫！？」

オージ「医者……だれか医者を呼んでくれ！」

子供達 医者を捜す

オージ「キクラゲ姫……キクラゲ姫！」

シーン「終わらない戦い」

ノックの音

キュロス「どなた？」

オージ「失礼します。」

キュロス「あら、オージ様。今日はどんなご用件で？」

オージ「キュロス様に少しお話がございました。」

キュロス「お話？」

オージ「……僕は最愛の人を亡くしました。」

キュロス「……その件に関しては本当に残念だったわね。一国も早く犯人が見つかる事を祈るわ……」

オージ「見つかったんですよ。」

キュロス「え？」

オージ「犯人はあなただ……キュロス様……」

キュロス「何を言っているの？」

オージ「キクラゲ姫にリンゴを渡すように言った老人を問い詰めたら、簡単に吐きましたよ。キュロス国王の命令だったと。」

キュロス「何を勝手な……罪をなすりつけようとしているだけだわ！」

オージ「僕も色々調べたんですよ。キクラゲ姫はこの国を追い出された王妃だとわかった。

あなたが彼女を殺す動機は充分にある。」

キュロス「落ち着いて話し合います。話せばきつと……」

オージが指を鳴らすと暗殺部隊入り
キュロス「何!?!」

にじり寄りキュロスを串刺しにする
オージ「痛みを感じる事に感謝しろ。」

白雪姫がラジオを抱えながら入って来る

オージ「白雪姫様?」

白雪姫「最愛の息子に殺されるなんて可哀想な人。」

オージ「え?」

白雪姫「せめて最後まで大好きな人の声を聞かせてあげる。」

ラジオを流す

ラジオ「それはもちろんあなただ。あなたがこの世で一番美しい。」

ラジオの方を向くオージ

ラジオ「もちろんです。あなたがこの世で一番美しい。クレオパトラよりも初音ミクよりもガンジス川よりも」

オージ「これは……」

ラジオ「あなたは世界中の誰よりも美しいということです。」

オージ「父上……」

白雪姫「ちーん……息子さんは私がしっかり支えるからね。安心して眠ってね。」

キュロスの目を閉じる

オージ 動かなくなったキュロスを見る

オージ「母……上……?そんな……そんな馬鹿な!」

ラジオ「ザー……やっぱり嫌だ、こんなもの作りたくない……だって私はずっとあなたのそばにいたいんだ。」

ラジオ「カッパキング様……ずっと……ずっと私のそばにいて……」

オージ キュロスの亡骸を見つめて

オージ「なんで……なんで……うわあああ!」

白雪姫「お母さんも死んじゃったね。可哀想な人。」

オージを抱きしめる

白雪姫「大丈夫、大丈夫。何にも心配しなくていい。これからは私があなたを守ってあげる。私があなたの太陽になってあげる。」

オージ「キクラゲ……姫……」

白雪姫「これから2人で幸せな国を作っていきますよう、オージ。」

チャンチャン